

Topics 生誕150周年安達峰一郎特別展

名声と苦悩の生涯概観

戦前の代表的国際人、出身の山形で

第一次世界大戦後の1920年に発足した最初の国際機構、国際連盟や常設国際司法裁判所(PCIJ)を舞台に、国際協調と紛争の平和的(法的)解決の実現に向けて数々の業績を上げた日本を代表する国際人の足跡をたどり、その生涯の意義を振り返る「生誕150周年記念 安達峰一郎特別展」が、山形県山辺町のふるさと資料館(阿部芳実館長)で開かれて

の出身。生家が残る地元では安達峰一郎博士顕彰会(会長・遠藤直幸町長)が組織され、学術研究所の土台となった書籍集『国際法にもとづく平和と正義を求めた安達峰一郎』(2011年刊)の編さん、全国の中高中生による記念弁論大会(山形大と同町主催)など、安達の足跡を後世に伝える取り組みが続けられてきた。生誕150周年にちなむイベントは、駐オランダ・駐クロアチア大使を歴任した辻優・学智院大特別客員教授を招き、6月に同町中央公民館で開かれた記念講演会に続くもの。同月には、東京で安達峰一郎記念財団(鈴木正貢理事長)主催のシンポジウム「よみがえる安達峰一郎 世界が称賛した国際人に学ぶ」も開催されるなど、安達の再評価を求める機運が高まっている。

記念展では同資料館敷地内の二つの蔵を使い、幼少期の素顔から国際法を志して上京するまでのエピソードをはじめ、PCIJ所長の任期後に体調を崩してオランダで病没、国葬に付されるまで、生涯の重要な転機を同町郷土史研究会の佐藤継雄会長(顕彰会副会長)や村山賢司副会長の協力を得てまとめた。

日露戦争後のポーツマス講和会議や第一次大戦のパリ講和会議での活躍、連盟理事会の少数民族問題や対独賠償問題をめぐる貢献、今日の国際司法裁判所(ICJ)の基礎となるPCIJ規約の策定や判事改選での最高得票当選などが時系列でパネル展示され、手に取るように概観できる。安達の横顔が刻印された大型のメダルやPCIJで着用した法衣、各国から贈られた勲章(いづれも記念財団所蔵)など、国際的な名声を伝える品々も公開されている。

外交官、国際法学者から判事に転身し、アジア人初のPCIJ所長を務めた安達峰一郎(1869〜1934年)は同町

の出身。生家が残る地元では安達峰一郎博士顕彰会(会長・遠藤直幸町長)が組織され、学術研究所の土台となった書籍集『国際法にもとづく平和と正義を求めた安達峰一郎』(2011年刊)の編さん、全国の中高中生による記念弁論大会(山形大と同町主催)など、安達の足跡を後世に伝える取り組みが続けられてきた。生誕150周年にちなむイベントは、駐オランダ・駐クロアチア大使を歴任した辻優・学智院大特別客員教授を招き、6月に同町中央公民館で開かれた記念講演会に続くもの。同月には、東京で安達峰一郎記念財団(鈴木正貢理事長)主催のシン

法による紛争解決と平和構築の理想を掲げ、連盟理事会やPCIJで一つ一つ実績を重ねていった安達の姿勢について国際法学会会員・法学博士の蜂谷哲平・顕彰会幹事はこう語る。

「若い頃は、安達博士もやはり国家第一の考え方でした。しかし、第一次大戦中のベルギー赴任で大きく変わったのでしよう。悲惨な監獄戦を目の当たりにしたことが、日本を中心にしたがら世界の平和への貢献を決心させました。彼ほど戦場の現実を見た日本の外交官は他にいません」

16、17の両日には安達の生涯を描く紙芝居が、23日には劇団やまのべの「神の衣を纏いて 異聞・安達峰一郎ものがたり」が上演された。特別展は12月27日まで(月曜休)。入館料など問い合わせは同資料館(023・664・5033)。



PCIJ判事の法衣を身につけた安達峰一郎の肖像画と関連書籍—山辺町ふるさと資料館で